

茶の湯 文化学会 会報

第121号 / 2024年6月25日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
<https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/>

最近の試み―次の時代に向かつて―

矢野 環

一九九三年十月十六日、からすま京都ホテルにおいて、茶の湯文化学会設立総会が開催された。二〇二三年十月に三十周年となり、今は三十一年目に入って半年を越えている。コロナ後であるかどうかに関わらず、新しい時代に向けての歩みが続いていかねばならない。少なくとも、諸種の事業で百万円弱を費消した二十五周年を迎えた頃とは、また異なった状況である。今年度も退会者を上回る新入会員が居られるが、さらに発展のためにはきちんとした体制を整備していく必要があるかと思える。また私自身が学会員として実際に活動を始めたのは二十一世紀になつたからであり、かつての事は解らない。同じような学会員の方

も多いであろう。そこで、最近の新しい試みや、過去に戻した事柄などがあるので、それらを整理しておく必要があるかと思つている。(以下、語尾は統一しない)

○学会誌『茶の湯文化学』

最新は四十一号(二〇二四・三)でした。何か気づかれたでしょうか。新旧会員いずれの方も、気づくチャンスはあったと言えます。それは、表紙の配色です。昔からの会員の方は、二十号までのことを覚えておられるかとも思います。表紙向かつて右の濃い部分とその左にある同じ色調の薄い部分は、「茶の湯文化学会」*号「茶の湯文化学」という文字また裏表紙の英語目次の文字と、「茶杓デ

ザイン」の色と調和したものとされてきました。しかし、事情が正確に記録されませんが、二十一号からの配色は右の部分だけが変化し、左は白色(クリーム色)相当文字と茶杓は常に同じ灰色(又は右の文字は白抜)になっていました。昔のことを御存じの方にとっては、四十一号は過去への復帰と思われたでしょう。二十一号からご存じの方は、全体が調和した配色になったと思われたかもしれません。この装幀は、佐村憲一氏のオフィスにより創刊号にあたって設計されたものであるから、今も氏の御名前は表紙裏にある。この度は佐村氏のご判断によって、四十一号以降の表紙の配色は学会に任せただけのことになった。二

十号までの配色を参考として、格調を保って続けていきたい。特に装幀を変更する必要は認めない。

ところで、奥付で何か気づかれた方があったらどうか。「編集・発行 茶の湯文化学会」は踏襲されているが、四十号までの「制作：思文閣出版」の記載が無くなった。このことは筒井紘一茶書研究会会長はすぐに気づかれたらしい。また「印刷：同朋舎」から、三十五号以降「印刷：思文閣出版印刷事業部」となっていたが、今回から「創文堂印刷株式会社」となった。一九九四年三月の創刊号からほぼ三十年間思文閣出版には大変お世話になってきたが、やむを得ない事情もあってこれも新体制となった。なお、元々創刊時から、一般書店での販売などは意図していない。

なっていた。しかし、ある時からなぜか異常に短いものになってしまった。三十三号（二〇二〇・三）での、「茶書研究の現在」では、各発表者の割り当ては二頁程度であった。但し、熊倉氏の発表相当は三十四号（二〇二〇・九）に十六頁の「茶書研究の過去・現在・未来」として収められている。三十七号（二〇二二・三）でも同様であり、しかも発表者中村修也氏は会誌用原稿を提出しなかった（提出しても二頁であるが）。田中秀隆氏による論説十七頁「近代茶道と岡倉天心の位相」は同号に収められている。このシンポジウムの頁割り当てでも、三十九号（二〇二三・三）の「わび茶の生成 珠光から利休へ」から、かつてのようにならなかならな十分な頁数とした。

さらに、書籍の書評・紹介において、かつては資料・史料的なものは評価に馴染まないとあまり採用されなかったが、これらも十分な記述ができるようにしたい。市販物ではない『野村得庵茶会記集成』で活用例を示したのが新規の例である。書評・紹介は、会員の著作紹介ではなく、会員全体の為の情報提供である。これまでも、『現代語訳 大正名器鑑 唐物茶入編』（三十八号。宮帯出版社）や、茶碗図集『茶の湯の茶碗』（全五巻。淡交社）のような紹介例はある。さらに、現物が寄贈されなくても、多少の紹介ができるように試みている。既に、大口樵翁関係書において行われ、また四十二号にもその例が出る予定である。

○例会の広報的活動―東京・東海・近畿 Zoom等
東京例会ではその世話人会により、二〇〇三年から「東京例会会報」を発行して来た。たまたま第二号には、当時東京に居た矢野の発表が記録されている。この編集・発行には、中村修也元会員が大変尽力された。そして、例会に来た会員にのみ配布することで、集客力の補助ともなっていた。さらに、近年では例会のZoom発信を試みてこられ、十分な成果が上がっている。また二〇二三年の大会もZoom発信された。これらに倣い、東海例会と近畿例会にて新しい試みが行われることになった。なお、東京例会では講演配布資料の図が他の会社により流用されたという問題があり、他の例会でも十分な規約の検討が必要となっている。現在、例会での新規の活動は、執行部への検討の後に理事会への報告事項として取り扱っている。

近畿例会広報委員会は東京・東海例会に倣って、近畿例会会報を発行することとした。すでに第一号は四月二十七日の近畿例会で白黒印刷が配布され、カラー版のファイルはその後配布された。さらに、東京例会にならって例会・大会のZ o o m発信を行うこととし、上記例会にて試みたが、かなり問題が発生した。ともかくも、Z o o m契約者に対しては記録のビデオ（新規撮影と編集済）は最終的に講義内容に相当する全体がきちんと公開された。今後は東京例会に倣って問題の起きないようになると期待される。

これらに伴い、Z o o mについては学会の契約とし、必要に応じて東京・近畿例会に貸与する形態とした。なお、例会会場費は元々学会負担である。これまで理事会のZ o o mは田中秀隆理事にご面倒をかけ、東京例会は独自に契約してきたという経緯がある。また、Z o o mは東京・近畿例会共通の

登録（会員二千円、非会員四千円）とした。原則的には例会のZ o o m関連費用は登録費でまなかえるべきであるが、現在は実験的に機器貸借で赤字が発生する可能性がある。今年度中に実際の状況がわかる予定である。二〇二四年大会・総会もZ o o m配信される。

海外からZ o o m契約したい場合、支払での手数料が極力かからないようにせねばならないが、諸種の困難がある（P e a t i xは試みるかもしれない）。また海外から会員になりたい方もあるが、会誌などの配布が相手国によっては昨今複雑な事情になっている場合もある。さらに、他の学会・研究会においては、外国からの発表がまともに聞き取れないといった現象も発生する。また、メモリー不足（他のソフトウェアを色々立ち上げているなども含め）などでZ o o mに問題が発生することもあったが、昨今ではそれらは改善されて来ている。アイドルグルー

プの新規メンバー候補の配信でも、かつては色々問題があった。むしろ、発表において自分のP Cを使いたいとして接続替えしても、うまく作動しないといった問題（結構起こる。同時に時間の無駄も）が発生しないように、すべての発表者は共通のP Cで講演するということを徹底する方が重要ともいえる。発表者はそれに応じた準備を行うわけである。

今後、他の例会においても新しい試みを行うおとされる場合は、例会執行部での意見取りまとめの上で、学会執行部に相談されたい。Z o o mはすれば良いというものでもない。また、S D G sと云えば、何かの免罪符になるというわけでもない。学会の会誌は、大量生産大量廃棄となる類の雑誌とは異なる。ある学内学会は冊子体会誌を無くし、公開してきた電子版を学会費支払者への対価として非公開・会員限定とする方針とした（これをどう思われるか?）。

また七十歳以上を会費無料としてきたある同窓会組織では、会費支払い者の漸減と諸費用増大にともない、会費増額のみならず、会費無料を七十五歳以上とすることにした。ある茶の湯関係組織も会費の増額を行う。ある大学では、諸種発行者が電子化されるにともない、印刷物配布中止のみならず一部を名誉教授宛には電子的にも非公開とした。これらの組織でも、また茶の湯文化学会でも、目前に迫った郵便料金改定について戦々恐々としている。今後の学会の安定した発展を願うものである。

例会

東京例会

（令和六年二月十七日）

「益田克徳の茶とその周辺
その五 所藏品と茶会記」
神保乃倫子・八木京子

益田克徳の所藏品には優品が多

かったと言われている。近年「益田克翁藏品売立目録」の閲覧が可能になり、そこには六一九点が確認された。有名道具には八幡名物の茶入や茶碗、遠州藏帳に記載があるもの、見立茶碗などがあり、その何れもが逸品揃いである。克徳が光悦茶碗「七里」を所蔵した背景は、当時「熱烈な光悦信奉者」と呼ばれていた図案家、岸光景宛の手紙に見る事ができる。克徳が岸から岸所蔵の光悦茶碗に銘を付ける様に依頼されており、それは「光悦信奉者」としても、道具に対する鑑識眼を持つている人としても評価されていた、といえる。

大師会の目的は鈍翁の趣味披露ではなく、大師の年忌法要であり、それに施茶と美術展観が付いた形であった、とする。更に、この軸は鈍翁晩年の「松花堂三百年忌茶会」の薄茶席「蝸殻庵」にも掛けられている。この「蝸殻庵」は、平面図から克徳の茶室「無為庵」の写しである事が判明した。又、「蝸殻庵」には仏壇があり「当庵伝来仏像」を祀っているとある。写しであるから、当庵とは「無為庵」であり、伝来とは、そこに縁の人つまり克徳であろう。鈍翁は最後に、このような形で克徳への感謝と追慕の念を表した。兄弟は常に二人三脚で茶の道を歩み、これも克徳の茶の姿である。

(令和六年三月十六日)

「元伯宗且文書」記載の名物の検証―寛永一〇年の千家と名物―

荒井欧太郎

発表では、表千家所蔵の元伯宗

且の書状および文書である「元伯宗且文書」の一つ、寛永十年（一六三三）四月二十七日付の元伯宗且書状（以下「元伯宗且文書」〔七〕と称する）を取り上げた。

「元伯宗且文書」〔七〕には、千利休旧蔵十三件、少庵宗淳旧蔵三件、柳営御物六件、織田有楽旧蔵五件、他十四件の総計四十一件（重複二件）の名物に関する情報が記されている。

坂口善保氏は、書状本文から名物を列挙した部分を引用し、注釈を加えた。田中稔氏も書状本文の現代語訳を試み、解説と注釈を加えている。しかし、坂口氏や田中氏の解釈や名物の個体比定には、不十分な点がいくつか認められる。

また発表では、織田有楽旧蔵の茶入として宗且書状に記載され、先行研究に言及がない「大なすび」について考察を試みた。織田有楽旧蔵品の一つに唐物茄子茶入 銘「宗伍茄子」がある。この「宗伍

茄子」の来歴に関して、柏木輝久氏と谷晃氏は、共に正伝永源院文書を典拠としながらも異なる主張をしている。そのため「宗伍茄子」と称された個体は、近世に二点存在した可能性が生じる。また有楽の茶会記とされる『有楽亭茶湯日記』には、「大茄子」と称される個体が登場し、これが宗且書状における「大なすび」と同一個体と推定できる。発表者は、この個体が後に「宗伍茄子」と称されるようになり、最終的に天樹院附の幕臣・長田十太夫重政に預け置かれた可能性を指摘した。

「千利休をめぐる茶書の歴史」展の総括と茶会記にみる茶掛の書について

峯岸佳葉

本発表では、(一)二〇二二年に齋田記念館で開催した企画展「千利休をめぐる茶書の歴史―築き上げられた茶聖像―」を総括し、次に、(二)利休時代の三茶会記

により、茶掛の書の流行の変遷について考察した。

(一) 企画展では、利休時代の比較的信憑性の高い『松屋会記』『天王寺屋会記』『宗湛日記』の三茶会記や、利休の愛弟子の著とされる『山上宗二記』に利休の実像を追い求め、一方で、その死後に編まれた茶書に、茶聖としての利休像がどのように築き上げられたのかを探った。

(二) 茶掛の書については、先述の三茶会記より人別の使用率を十年毎に算出してグラフ化の上、考察した。唐物では虚堂智愚、無準師範、圓悟克勤の墨跡が、和物では藤原定家の和歌色紙が初期より人気が高かった。また茶会記中の開山墨跡を、圓悟克勤、宗峰妙超、夢窓疎石、大林宗套などとす

る諸説があるが、開山墨跡の使用のピークは一五六〇年代にあり、圓悟克勤の墨跡と似た推移をたどるため、発表者は開山を圓悟克勤と考えた。最後に、一行物や横物の大字について、その最も早い記録は、天正七年の鉢屋宗与の会の一山一寧の名号(『松屋会記』)だが、天正一八年の利休の会では春甫宗熙の横物の大字や、天神名号が用いられ(『宗湛日記』)、利休は晩年大字を嗜好している。一五九〇年以降、一山一寧、一休宗純、当時の大徳寺住持の墨跡の使用が急増するが、これは大字の嗜好という形式上の流行と関連しているのではないか。

近畿例会

(令和六年三月二日)

『宗及茶湯日記(天王寺屋会記)』に見る戦国期の茶の湯の諸相²

山田哲也

「茶書古典集成」刊行にあたって書名採用方針が変更され、『天王寺屋会記』から『宗及茶湯日記』に改められた、天王寺屋三代の自他会記についての二度目の報告である。

二代目の津田宗及の自会記初会は、永禄九年十月七日であった。客は一族の宗閑らである。床に西巖了恵の墨跡を掛け、茶碗は「神事翁天目」、天目台は花形台であった。何れも父の宗達遺品である。

この中で「神事翁天目」は宗達が天文二十一年十一月十七日に初めて使用している。ところで筆者は他会記において、先行研究に惑わされ、この「神事翁天目」と堺衆の太和屋正通所持の「翁天目」を混同して理解し、執筆した。これは『角川茶道大事典』などの事典類の内容が誤っていたことが大きい。他社の茶道辞典・事典類も同様であった。そこで筆者は「茶書古典集成」第四巻『宗及茶湯日記』自会記において、「神事翁天目」は宗達から譲られた後、一度は織田信長家臣佐久間正勝の手に渡ったが、二年ほどで宗及の元に戻ったこと、「翁天目」とは別物であることを提示した。

また宗及の茶席の花に「稲の苗」

や「麦の穂」など何れも田植えや麦秋にちなむ、季節感豊かなものが用いられたという寺田孝重氏の研究を再確認した。同氏によれば宗及の用いた椿・梅・菊といった花が後の茶席の花の主流になったという。

最後に『宗及茶湯日記』の「宗及自会記」の多変量解析を試みて、そこに参加した人物の親密度を提示した。そこには宗閑を始めとした一族、利休グループ、禅僧グループ、旧仏教グループ、堺代官松井友閑などが存在した。

「江戸時代中期の茶書にみる露地の植栽への試論 千家系茶書を中心に」

八尾嘉男

本報告では、江戸時代中期の千家系版行茶書を中心に、版行茶書以外の千家系茶書も目を向けて露地の植栽について検討を試みた。

山田宗偏は『茶道便蒙抄』で、露地の植栽に適した草木に松と

檜、紅葉（楓）、萩と薄をあげている。また古田織部は横や縦、木斛を植えた。ほかに中国の風情を感じさせるもの、茶席で花入に活ける草木を露地には植えないと説かれていたことを指摘した。

杉木普斎の考えでは檜は白檜となり、竹や栗、椎やグミ、山柿（豆柿、信濃柿）、厚朴、くちなし、青木、錦木、はぜのき加わる。普斎は南天や梅擬、苺は実がなることから、あまり好ましくないと考えていた。草は薄や萩、落、シダ、朝顔があがっている。

『茶話指月集』は利休の話などをしり、席中での話題の一助に寄与する側面が強い。そのなかで、露地の植栽に適した木に椋があげられている。そして、遠州が茶人として円熟期を迎えたところに露地から花を咲かせるものが避けられたことが記述からうかがえる。

これらの茶書にあげられた草木は、周辺に自生しているものばかりであり、野山を写す体として植

えられて違和感のないものである。また検討から、いくつかの草木の名がないことを示すことができた。梅、桜、桃、椿、菊、柳である。また杉と檜の名もない。

千家伝来の茶書は、いずれも表千家所蔵の「宗旦自筆古図」（中村昌生氏紹介）、『茶湯覚 但数寄物語上・下』、『逢源齋書』上・下、『茶之道問書』「九」での検討を考えたが、私が時間配分を考えずに話したため、触れることはできなかった。千家伝来の茶書への検討は、さらに増補をしたうえで今後の検討課題としたい。

（令和六年度四月二十七日）

「茶会記にみえる鮠（鮠）——茶湯と生成の鮠（鮠）——」
櫻井信也

茶会記が登場する十六世紀前半以降の時代の鮠（鮠）は、魚や貝、野菜、根菜などを米飯の「漬け床」に漬けて醗酵させ、酸味が生じたものを食するもので、熟れ鮠（鮠）

と称されている。『松屋会記』『宗及茶湯日記』『神屋宗湛日記献立』での江戸時代以前の茶会にみえる鮠（鮠）と、当該期の寺家や社家、公家の日記にみられる鮠（鮠）とを比較すると、魚類のなかで鮠や鮠の鮠（鮠）が多いのは、茶会記と日記に共通するところであるが、茶会記には、日記では『兼見卿記』での一例を除いて現れない生成の鮠（鮠）がみられることが注意される。「生成」は「なまなり」と訓み、「不完全な出来」「不十分な出来」という意味である。一般的な熟れ鮠（鮠）と比べると、醗酵が十分ではない鮠（鮠）というわけであるが、食品としては完成しているものである。

生成の鮠（鮠）は、もっぱら茶湯における料理献立としてみえており、『宗及茶湯日記』や『神屋宗湛日記献立』の記載では、津田宗及の堺での茶会に多いが、京での茶会にもみられ、『兼見卿記』での記載は日野輝資の茶会であ

る。これらのことは、当該期の茶人に好まれたものであることを示唆している。茶会記からは、酢を付けて食していることや、その食材が鮠に限られていることも判明する。日本列島での鮠（鮠）の変遷のなかでの生成の鮠（鮠）の位置付けを見直す必要がある。

「石州、綱村、宗雅の茶会記——客、香、茶杓——」
矢野 環

特徴のある茶会記について説明し、また新しい観点について解説した。

遠州・織部・宗和の茶会記と、石州・綱村・宗雅の茶会記の基本的な事項を確認し、茶会記の単純指標として、 α :客の数、 β :延べ客数、 γ :客名付の茶会の回数の三つを元にした
 β/α :客の数に対する茶会数比
 γ/α :一回の茶会の平均的客数
 γ/β :客一人の平均茶会参加数を提案した。

さらに、経済学で使われる「パレート分析」を利用し、茶会記のパレート数P20を提案した。具体的状況を示すパレート分布の図は、エクセルでも出すことができる。松平不味と片桐石州は $P20=0.70,0.39$ となり、不味が友人と茶会を楽しんでいたのに対して、石州が業務的に多くの客に対応したと思われることが図示できる。そして、主成分分析を利用すれば、P20とP20は線形に殆ど同等の効果を示すことがわかる。二十四件の茶会記について、P20とP20を用いた散布図を提示した。

茶会記での客の出現回数はいく、一覽表として提示される。しかしそれのみでは、客の関係は判然としない。そこで、共起性を検討する。即ち、客の茶会での同席状況を分析すると、客の親近性が見えるようになる。言語学での共起性を分析図示するソフトウェアを利用して、共起グラフを描けばよい。

伊達網村の茶会では、六十七件の沈香が表れる。茶約作者三十一名も濃茶・薄茶別に記載される。他の茶会記ではみられない特徴である。

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でのお知らせはしておりません。

※日程等未定は、次号の会報またはホームページにてお知らせいたします。ご確認ください。

※東京・近畿例会では、会場とZoomのハイブリッド開催を行っています。オンラインの参加は、ホームページの例会参加申込フォームよりお申し込と同時に、年会費二千元(会員)・四千

円(非会員)をお振り込みください。

東京例会

令和六年七月六日(土)

(会場：埼玉会館3A会議室・会場とZoomのハイブリッド開催)

午後二時～

張 茹滴

「文徵明茶詩の陸游詩受容(仮)」

岡 宏憲

「岡田茂吉について(仮)」

令和六年九月二十八日(土)

(会場：未定・会場とZoomのハイブリッド開催)

午後二時～

岩田澄子

「光悦黒楽茶碗「七里」の銘について―『七里家代々直筆』(射和文庫蔵)を端緒として―」

依田 徹

「田安慶頼について―玄々齋と井伊直弼との関係から―」

令和六年十二月予定

(会場：未定・会場とZoomのハイブリッド開催)

東海例会

令和六年九月二十八日(土)

(会場：昭和美術館会議室)

午前十時～

茶会「初秋―月を愛でる―」

令和六年十二月七日(土)

(開場午後一時半～)
午後二時～三時半

加藤祥平

「日本中近世における唐絵の受容」

近畿例会

令和六年七月二十日(土)

(会場：同志社大学 今出川キャンパス 良心館RY401・会場とZoomのハイブリッド開催)

午後二時～

廣田吉崇

「八戸藩における高橋道竹流の展開―創作される茶の湯流派として―」

中村 幸

〔未定〕

山本堯、伊住禮次朗共同発表

〔胡銅製作技法研究序説〕

山本 堯

令和六年十月二十六日（土）

（会場：同志社大学今出川キャンパス 教室未定・会場とZoom

のハイブリッド開催）

午後二時～四時

豊田裕章

〔未定〕

〔未定〕

令和六年十一月十六日（土）か二十三日（土）

（会場：同志社大学今出川キャンパス 教室未定・会場とZoom

のハイブリッド開催）

午後二時～

宮武慶之

〔未定〕

〔未定〕

令和七年二月十五日（土）

（会場：同志社大学今出川キャンパス 教室未定・会場とZoom

のハイブリッド開催）

午後二時～

午後二時～

令和六年十月二十七日（日）

（会場：金沢市文化ホール 茶室 閑清庵）

午前九時三十分～

能登半島地震支援チャリティー茶会

日時未定

（会場：金沢文化ホール 第二会議室）

北春千代

〔加賀七種ノンコウ茶碗について〕

*金沢市文化ホール 金沢市高岡町一五一ー一

高知例会

令和六年九月十五日（日）

（会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室）

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

〔地域の茶人に学ぶIV〕

令和六年十二月八日（日）

（会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室）

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

〔地域の茶人に学ぶIV〕

令和六年十月二十七日（日）

（会場：金沢市文化ホール 茶室 閑清庵）

午前九時三十分～

能登半島地震支援チャリティー茶会

日時未定

茶の湯関係文献を読み所感の発表

〔地域の茶人に学ぶV〕

正午～午後四時

軽食茶事 席主 三名

会費 三千元

（参会希望者は予めご連絡下さい）

令和七年二月九日（日）

（会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室）

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

〔地域の茶人に学ぶVI〕

高知支部二〇二五年度事業計画

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

※二〇二四年度年会費を払込みください

